

文化・文芸

bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

今こそ

チエーホフ

約百年前のロシアで書かれた静かな悲喜劇。揺らぐ時代を生きる私たちの姿が重なる。



「チエーホフ」(岩波新書)から

足あと

1860年、南ロシアのタガンローグ生まれ。モスクワ大医学部入学後、家計を助けようと雑誌などに寄稿を始める。87年、初の本格戯曲「イワーノフ」上演。20代で肺結核を患い、「桜の園」初演の1904年に病死。生涯で約600編の作品を残す。戯曲は17本。「プロポーズ」「熊」など一幕物のドタバタ劇も。

もっと学ぶ

浦雅春さんの『チエーホフ』(岩波新書)は生涯をたどりつつ作品の深層を読み解く。『チエーホフの戦争』(ちくま文庫)は宮沢章夫さんによる4大戯曲の読み直し。記事中の戯曲は光文社古典新訳文庫所収の浦さん訳を引用。

かく語りき

「世界はすばらしい、ですが、ただ一つすばしくないものがある、それはほくらです」(サハリンから帰還後の書簡『チエーホフ』から)

チエーホフの芝居の人物たちは、本当によくしゃべる。「桜の園」(1904年初演)では、領地の競売が迫る中、地主と屋敷の人々はそれを防ぐ行動を起こすこともなく、追憶にふけり、うわさ話を繰り返す。彼らのセリフは対話というより「つぶやき」だ、とロシア文学研究者の浦雅春さん。「誰かに『分かってほしい』と思いつつも、自分でも言語化できていない。責任を持って応えることもできない。だから話ばかり合わないのです」モスクワへの帰郷を夢見る姉妹を描く「三人姉妹」(01年初演)で、一家の長男アンドレイは、相手が言葉を確認することも求めない。耳の遠い老人に人生の悩みを打ち明け、一言、「お前の耳がちやんと聞こえんだったら、ほくは話なんかしゃやしないさ」問題に気づきながらも解決

手詰まり感「つぶやき」に反映

方法を見つけれず、決断できない。コミュニケーションの不成立。浦さんは「手詰まりの状態にして、今の我々に似ていないでしょうか」。チエーホフがデビューしたのは、トルストイらロシア文学界の巨匠が一線を退いた1880年代。この頃、社会も大きな変革の時を迎えていた。急速な近代化、知識人による農民啓蒙運動の挫折。「『大きな物語』が崩壊し、光明が見えない」時代の雰囲気、彼の芝居の語るべき言葉を持たない人々に反映されていると、浦さんはみる。もう一つ、作品に大きな影響を与えたのが1890年のサハリン旅行だ。そこは囚人の流刑地。浦さんは「地獄」が日常としてある現実を前にチエーホフが「世界を中心」がモスクワだけではないことに気づいた」とみる。以降、最晩年に書かれた

時代の変化の予兆 戯曲に

「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」の4大戯曲では、視点は主人公の一つの「物語」に収斂されることなく、拡散していく。チエーホフは、日本でシェークスピアと並び上演の多い外国の劇作家だ。特に4大戯曲はここ四半世紀ほどの間、翻案や様々な演出により、繰り返し見直されてきた。劇作家・演出家の宮沢章夫さんは「チエーホフが戯曲に込めた、時代が大きく変わる予兆の持つ爆発的なエネルギーが普遍性をもたらした」。例えば「三人姉妹」には、「戦火」の予感を感じるといふ。それは軍人が多く登場するからというだけではない。当初、姉妹に馬鹿にされていた娘ナターシャはアンドレイと結婚。姉妹と夫の生活を支配し、召使たちを怒鳴りつける女主人へと変身する。誰も彼女を止められない。「今の日本は圧倒的な力に弱いと思う。日本中がアンドレイのようなもの」と宮沢さん。「日本の戦前を考えると、ある時を境に価値観が変わったはず。『いつの間にか』という感覚が、彼女に象徴されている感じがした」と話す。「三人姉妹」第3幕で起きる火事は、半鐘の音で表現される。この作品に限らず、4大戯曲において事件はほとんど舞台上で起こらない。私たちは音や言葉から、舞台の外側で起きるそれを推し量る。宮沢さんは「ジャーナリストイックなもの」と違い、フィクションはそれを「私の問題」として想像させる力がある。これこそ、チエーホフが我々に与えてくれた大きな資産。言葉にならない声の怖さ、深みに耳をすまし、人に伝え難いことを知る。それが、チエーホフを読み直す一つの意味だろう。(増田愛子)

◆過去の作家や芸術家などを学び直す意味を考えます。来週は思想家・新渡戸稲造の予定です。